

〔第27回学術集会 シンポジウムⅡ〕

## 家族をひらく，家族がひらく

浜松医科大学医学部看護学科

(座長) 影山 葉子

東京慈恵会医科大学医学部看護学科

児玉 久仁子

「多様な家族」はすでに私たちにとって聞き慣れたことばになっているにもかかわらず、私たちの家族のとらえ方や日常の看護実践はその多様性に適応できているかと問われると、疑問を感じることも多いかと思えます。選択的夫婦別姓や同性婚に関する制度、里親等の家庭養護など、他の先進諸国に比べて日本では受け入れられにくい現状も指摘されています。

今回の学術集会のメインテーマは、「未来をひらく」でした。「家族」というのは、家族メンバー以外の者が関与しにくく、お互いに親密な関係でつながった、私的な領域にとらえられていると思えます。こうした関係性や領域は私たちにはとても大切なものですが、反面、虐待や育児・介護のようなケア労働といった問題などからみえてくるのは、家族は私的に閉じられたものではなく、開いていく必要性であり、家族を物理的・心理的に開くことは、未来に向けて私たちの価値観や社会を拓く、啓くことにもつながるのではないかと考え、「家族をひらく，家族がひらく」というシンポジウムを企画いたしました。

シンポジウムの切り口として子ども中心とした親子関係に着目し、「血縁」「モノガミー」「子どものため」という、あたりまえを疑うこと、批判的にとらえることに挑戦しました。シンポジストには、それぞれ多様な場で活躍され、多様な経験をもつ3名

の方々をお願いすることができました。近藤日出夫先生からは施設養護で育った当事者と施設職員としての実践者という2つの立場から、野辺陽子先生には家庭養護についての研究者の立場から、星野諭先生にはNPOの実践者の立場から、非常にリアルな声と、私たちの思考に刺激を与えてくださるお話を届けていただきました。近藤先生と星野先生のご講演内容の詳細につきましては、先生方が執筆された記事をご覧くださいと思います。野辺先生からは、養子縁組の子ども当事者を対象にしたご自身の研究をもとにお話をしていただきました。看護職として、対象となる人々にはより早く、より効果的な支援を提供したいと考えます。そのため「望ましい支援方法」に目が向きがちですが、それ自体が支援者側の押しつけになっていることもあり、むしろ「支援にあたり気をつけること」を検討した方が、ひとり一人が多様な経験をもつ当事者への多様な支援を考えるためには重要であるということ、野辺先生のお話から学ぶことができました。

COVID-19感染拡大という未曾有の事態によって、現在では、家族をひらく，家族がひらくことが難しい状況になっているように感じますが、本シンポジウムで皆さまと議論したことの中に、これからの家族看護をひらく何らかのヒントがきっとあるはずです。